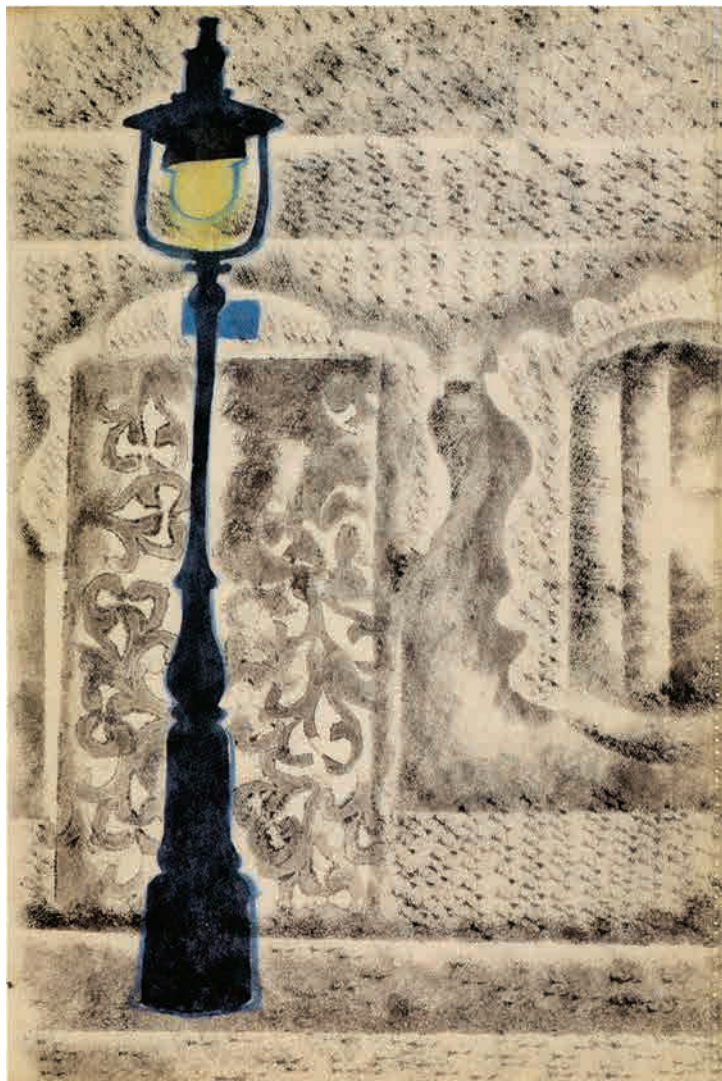




2026年月3月31日発行
公益財団法人 大川美術館
〒376-0043 桐生市小曾根町3-69



茂田井武「ton paris」より〈街灯〉1930-33年

ことば 148

お先まつくらの旅ほど悲しく不安なものはありません。
だが、もう後へは戻れません。汽車はどうやらパリーへ入りました。
うす汚い名状し難い城壁のやうな壁の間を走るのをみて、
パリーくそくらへと思ひました。

(茂田井武「欧州珍栗毛」『オール讀物』1949年12月号)

今号の『ガス燈』では、企画展「没後70年記念 茂田井武『ton paris』とパリの画家たち」に関連して開催した講演会（「茂田井武 欧州放浪の旅」、1月31日）にご登壇いただいた安曇野ちひろ美術館副館長・上島史子氏に寄稿をお願いしました。ここに改めまして謝意を表します。

茂田井武の欧州放浪

上島 史子

欧州滞在中の3冊の画帳

茂田井武（1908-1956）は、1930年、21歳の時にパリを訪れた。《ton paris》（大川美術館所蔵）は、その滞在中に描かれた画帳である。お金も持たずにパリに着いた茂田井は、翌日から17区のデパルカデール通りにあった日本人クラブで皿洗い兼給仕として働き始めた。《ton paris》には目に触れるもの全てが新鮮な、20代の若者の感性がとらえたパリの街が描かれている。

茂田井が子どもの頃の美術教育は臨画が中心だったが、中学生になるとそれでは飽き足らず、好きな絵を描くようになった。その頃に「海外の新興美術の紹介が次々と、未来派、表現派、立体派、野獣派という形の大津波となって押し寄せてきて私達はそれに巻かれてフラフラになった」^{*1}という。1920年代のパリは、芸術の都として世界中の画家たちが憧れ、集った街だった。中学卒業後、美大の受験に失敗した茂田井は、居場所を見つけれないまま、写生旅行と称して鞆ひとつでパリへ向けて旅立った。

パリに渡っても、茂田井に他の画家たちとの交流の記録はほとんどない。給仕などをして働きながら安酒場で酒を飲み、休みの日にはルナ・パークやグラン・ギニョールの怪奇劇、メドラノ・サーカスに出かけ、切り抜き紙芝居をつくって子どもたちを喜ばせるなど、街での生活にとけ込んでいった。茂田井にとっての絵の勉強は、仕事を終えてアパートに帰ってから、夜な夜な記憶を頼りに、絵日記のように小さな画帳に絵を描きためていく、というものだった。ヨーロッパ滞在中のおよそ3年の間に描かれた画帳が何冊になったのかははっきりしないが、《ton paris》のほかに2冊の画帳が現存する。

《Parisの破片》は、パリでの私生活を描いた日記風の画帳だ。モンパルナスのデュトー街にあったアパートのようすや、パリで関わった女性たちの姿、茂田井自身の姿もたびたび描かれている。この画帳は1933年にパリに別れを告げてアントワープに発つ場面で終わる。

1932年1月から8月頃まで、茂田井はジュネーブに長期出張し、その後も翌年春までパリと行き来していた。《続・白い十字架》はスイスに滞在した日々の情景を描いた画帳だ。レマン湖畔の陽光あふれる風景や、子どもたちの姿などが描かれている。茂田井がジュネーブにいた時期は、国際連盟の本部があったこの街で、軍縮会議が行われた時期に重なる。第一次世界大戦の反省から設立した国際連盟だったが、1933年には日本とドイツが脱退し、再び世界が戦争へ向かうのを止めることができなかった。この画帳の最後には、戦争で傷ついた兵士の姿が描かれている。



茂田井武 画帳《Parisの破片》より 1930年頃～35年頃
ちひろ美術館蔵

印象のレンズ

ヨーロッパの旅から戻って10年後、第二次世界大戦中の1943年から44年にかけて、茂田井は旅の記憶を小さな折本の画帳《古い旅の絵本》に描いた。この画帳を贈られた方は、外套に画帳専用の内ポケットを縫いつけ、空襲のときにはその中へ入れて避難したという。折本の片面には、福岡から京城（現・ソウル）へと渡り、ハルピンを経てシベリア鉄道に乗り、モスクワ、ワルシャワ、ベルリン、ケルンなどの街に立ち寄りながらパリに至る行程を見ることができる。裏面にはジュネーブとアントワープに続き、ロンドンから日本行きの船に乗せられ、マルセイユ、ナポリ、ポートサイド、

スエズと帰路で目にした風景が描かれている。

茂田井は「印象のレンズ 私の描きたい絵」^{*2}というエッセイのなかで、描きたい絵について「記憶にひっかかってぬけないもの、過去の印象の鮮明なもの」と語っている。脳中の印象を紙に焼き付けるように一枚一枚と描き続けていくうちに、想い出の映像は濃度を増して、「その時そのままの不死の姿」に近いものになっていくという。旅先で描いた画帳の多くは戦災で消失したが、記憶の中の光景は濃縮されてこの画帳に描き出されている。



茂田井武 画帳《古い旅の絵本》より 1943～44年
ちひろ美術館蔵

子どもの本の画家として

1944年に軍に召集されて中国に渡った茂田井は、北京で終戦を迎え、1946年1月に焼け野原となった東京に復員した。その後、茂田井はあふれるような勢いで自由に絵を描き始めた。旅で見た光景や童話の一場面、おもちゃやわが子の姿などを描いては三疊間の壁に貼ったといい、四隅に画鋏の跡のある絵が数多く残されている。この時期に描かれたものに《幼年画集》と題した3冊の未完の折本がある。1910年、満2歳のときに物干し台で乳母に抱えられてハレー彗星を見た記憶や、布団部屋でかくれんぼをする幼い自分の姿などが描かれている。茂田井は日本橋の大きな旅館の次男だった。15歳のときに生家は関東大震災で全焼したが、幼い日の印象は時間を経ても色褪せなかったことがわかる。画帳が未完で終わったのは、依頼される仕事が多くなりすぎて、自由に絵を描く時間が取れなくなったからだろう。

茂田井が子どもの本で活躍したのは、主に1946年から亡くなる1956年までの10年間、日

本が敗戦の混乱にあった時代だった。軍国主義のなかで、子どもの本は戦意高揚の道具として利用された。戦争が終わって民主主義の時代になると、子どもに文化を届けたいと願う大人たちが、良心的な雑誌の創刊や児童書の出版に乗り出し、子どもの本は飛ぶように売れたという。粗悪な仙花紙に印刷され、子どもたちをいっとき楽しませたら消えてしまうそうした本に、茂田井は身を削るようにして絵を描いた。

1956年、亡くなる半年前に「こどものとも」の2号として出版された『セロひきのゴーシュ』は、今も版を重ねている^{*3}。当時茂田井は病床にあって筆を取るのもままならない状態だったというが、宮沢賢治の童話と響き合う、ユーモアと素朴な詩情に満ちた絵を描き上げた。日本の絵本の文化がまさにこれから花開こうとする時期、この絵本が後に続く画家たちに与えた影響は大きい。



茂田井武 絵本『セロひきのゴーシュ』（福音館書店）
表紙原画 1956年 ちひろ美術館蔵

2009年、ちひろ美術館では、茂田井武のご遺族が大切に守ってきた作品の寄贈を受けた。作品の保存とともに、その画業を広く後世まで伝えるべく、今後も努めていきたい。

（安曇野ちひろ美術館副館長）

注記

(1)・(2) 茂田井武「印象のレンズ 私の描きたい絵」『教育美術』1952年5月号 教育美術振興会

(3)『セロひきのゴーシュ』宮沢賢治・原作 佐藤義美・案
茂田井武・画『こどものとも』1956年5月号 福音館書店（改訂版『セロひきのゴーシュ』宮沢賢治・作 茂田井武・画 1966年 福音館書店）

【研究ノート】

清水登之の1944年の日記

小此木美代子

2025年夏に当館で開催した特集展示「戦後80年 松本竣介と同時代の画家たち」（会期：2025年7月19日～9月7日）では、清水登之（1887-1945）の戦中期の日記4冊（1941年～1944年）と、長男・育夫の戦死後に制作された白い夏服姿の《育夫像》（1945年 油彩・カンヴァス、90.4 × 64.5cm）を紹介した。



展示風景

清水登之は若くして軍人を志して上京するが、陸軍士官学校受験に失敗し渡米する。その後アメリカで絵画を学び、フランスに渡って評価を得た。帰国後は独立美術協会の結成に関わり、画壇の中核で活躍した。日中戦争以降は従軍画家として戦地に赴き、戦争記録画の制作にも従事している。

当館には1917年から1944年までの日記28冊が収蔵されている（1907年から1916年までは清水自身が後年「略誌」として一冊にまとめ、1928年分は所在不明、1945年分は個人蔵）。本稿では、しばしば各時期の清水の画中に描かれ、さらに清水逝去の年、前年に戦死した育夫の肖像が制作されるに至る前史として、育夫が出征した1944年7月12日から年末までの約半年間の日記に着目する。

清水が育夫の戦死を知るのは翌1945年6月のことであり、《育夫像》が制作されるのもその直後からである^{※1}。制作直前あるいは制作過程における心情については1945年の日記に詳しい記述が残されているが、本稿ではあえてその前年である育夫不在が始まった1944年後半約半年間の

日記を概観し、《育夫像》成立に至る心理的背景を形成した時間の推移を整理する。以下、日記の記述を要約して記す。

・7月12日 欄外に「育夫佐世保に向け出発」と横書き。白靴を磨く育夫の姿について「神に通ずるものを吾子に見た」と記す。妹・富美子も早起きして共に朝食をとり、その後兄妹の写真を撮った朝の光景が綴られる。育夫は、門前や庭先、立葵の傍らで強い光を浴びつつ、9時半に出発。

・7月13日 育夫の佐世保着に不安を抱き、山内氏へ打電。

・7月15日 山内氏より「育夫昨日佐世保へ着任」との電報が届き、一時的に不安が緩和される。

・7月18日 気分晴れ、六号五点描く。独立秋季展は資生堂で開催予定。サイパン島玉砕の報を聞く。向島の非戦闘員の悲惨を思う。

・7月19日 育夫から第一信が届き、出発後の様子が判明し安心する。

・7月22日 育夫から博多経由の葉書到着。一人旅の様子が伝わる。

・8月3日 親子三人で出かけ、久里浜で育夫と撮影した記念写真が二か月ぶりに届く。

・8月7日 育夫が月給を母に預け、祖母へ百円渡すよう澄子が手続きする。

・8月15日 欄外に「上海へ向け出発」と書き込み。育夫を前線へ送り出してから渡支したため出発が遅れたと記す。

・9月28日 山本中佐に託して澄子への手紙を内地で投函してもらう。

・10月8日 富美子の手紙と、庭の紅葉や銀杏の葉の写生が届く。兄（育夫）の所在が判り喜ぶ様子が記される。

・10月9日 夜、澄子と富美子に手紙を書く。

・10月15日 台湾沖で敵機動部隊撃滅の報。久しぶりに軍艦マーチを聞き、高揚した気分が記される。

・10月17日 台湾沖の戦局は劣勢。敗走しつつ戦果拡大を知る。

・10月25日 澄子より育夫の書面が到着。

・11月21日 欄外に「育夫此日台湾沖海戦ニ於テ戦死」（頁左部に比較的小さな文字で縦書き）、「昭和二十年六月四日海軍省ヨリ通知アリ」（頁上部にやや大きめの文字で横書き）と追記。（戦死の報を受けた

以上のように、1945年の日記は《育夫像》の制作過程を具体的に伝えている。一方、本稿で紹介した1944年の日記は、戦死という決定的事実には先行する不在の時間を記録する資料として、《育夫像》成立の前史を補完している。

(当館学芸員)



日記外観

註記

※1: 清水登之は、これまでの日記から育夫に関する記述を抜き出しまとめた『育夫小伝』の執筆も行っている。『育夫小伝』は、清水登之「育夫小伝(前編、後編)」栃木県立美術館紀要No.1、No.2(1974年)に翻刻掲載されている。1945年の日記については、杉村浩哉氏『1940年代美術に関する論文集1 清水登之の終戦—1945年の日記から』(栃木県立美術館、2018年)に詳しい。以下の引用は、杉村浩哉氏による翻刻(前掲書)からの抜粋である。

1945年6月4日「育夫戦死ノ報ニ接ス 去る四月頃育夫乗り組みの金剛沈没を聞き豫てより覚悟はしてゐたが胸が塞まる思ひが幾日か続いた 富美子には可成知らせないことにして澄子と二人悲んだ、其後育夫の俸給六月分まで九カ月一緒に届けられたので其時の喜びは育夫誕生日にも増した、然しその喜び吾家の幸福は遂に今日の知せにより一瞬に消し飛んだ終つた。御国の為に散つた育夫は出征前覚悟を極めて先祖を辱めぬやう両親に誓つた 遂に戦死をした。胸の裂ける思をどうすることもできぬ。夕刻家中の母正六の自転車で帰宅して呉れた。富美子学校を休んで兄の冥福を禱る。育夫無きあとの将来を考へるとどうしてよいか迷はざるを得ない」

1945年6月5日「最う少し気分には余裕が出来たら油絵の肖像を描いて遣すことにしよう。これ以外育夫に対してすることはない」

※2: 杉村浩哉氏『1940年代美術に関する論文集1 清水登之の終戦—1945年の日記から』(栃木県立美術館、2018年)

※3: 前掲書。ここで記されているのは、当館所蔵の青い背景の《育夫像》と推測される。本作は、画面右下に「昭和二十年六月父写」と記されている。2015年、東京藝術大学美術研究科文化財保存学(保存修復油画研究室・木島隆康氏監修)における修復報告によれば、石膏ボードのような支持体に描かれており、裏は土と繊維が混ざったような素材で非常に脆い。薄い灰色の地塗りがされている。額の裏板には前面に育夫の履歴が書かれており、裏側には風景が描かれていた。

付記

2025年6月19日、清水登之長女・中野富美子氏が94歳で逝去されました。生前のご厚情に感謝申し上げますとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。長男・貴史氏には、本稿掲載にあたりご理解とご協力を賜りました。また、栃木県立美術館・武関彩瑛氏、栃木市立美術館・杉村浩哉氏、河野エリ氏より資料のご提供を賜りました。記して深謝申し上げます。

令和7年度 新収蔵作品

令和7年度に大川美術館に寄贈された作品を、新収蔵作品としてご紹介します。今年度も個人の方々から、長年にわたり大切にされていた作品をご寄贈いただきました。当館としては、これから作品の保存と公開につとめて参ります。ご寄贈いただきました方々には、つつしんでお礼を申し上げますとともに、深く感謝申し上げます。

畦地梅太郎《八ヶ岳山ろく(冬)》1952年

畦地梅太郎《親子鳥》1955年

畦地梅太郎《山の親子》1975年

オノサト・トシノブ《Silk-74》1975年

オノサト・トシノブ《[作品]》1977年

掛井五郎《どうして人は木になろうとするか? VI》2001年

(以上6点 田邊啓子氏遺贈)

難波田史男《湖上》1972年(福田裕氏寄贈)

簗輪初太郎《ガラス器の桃》1964年(1976年加筆)

(鈴木富美子氏寄贈)

丸尾康弘《待》1996年

丸尾康弘《青い箱》2001年

丸尾康弘《ここにいる》2001年

丸尾康弘《その日から》2001年

丸尾康弘《つぶやき》2001年

丸尾康弘《遠くへ》2001年

丸尾康弘《夜の光》2002年

丸尾康弘《黄色い椅子》2002年

丸尾康弘《会いに行く》2003年

丸尾康弘《TO BE》2003年

丸尾康弘《檸檬》2003年

丸尾康弘《Child 4》2003年

丸尾康弘《Child 2》2005年
 丸尾康弘《Child 3》2005年
 丸尾康弘《Child 指》2005年
 丸尾康弘《くも耳1》2008年
 丸尾康弘《くも耳2》2008年
 丸尾康弘《くも耳3》2008年
 丸尾康弘《くも帽子1》2008年

(以上19点 丸尾康弘氏寄贈)



蓑輪初太郎《ガラス器の桃》1964年（1976年加筆）
 鈴木富美子氏寄蔵



畦地梅太郎《ハヶ岳山ろく(冬)》1952年 田邊啓子氏遺贈



オノサト・トシノブ《[作品]》1977年 田邊啓子氏遺贈



丸尾康弘《待》1996年 作者寄贈



難波田史男《湖上》1972年 福田裕氏寄贈



丸尾康弘《Child 4》2003年 作者寄贈

【ワークショップ報告】

大川美術館×群馬県立女子大学 ステンシルでオリジナルカードをつくろう！

群馬県立女子大学アートマネジメントゼミとの連携事業として、企画展「没後70年記念 茂田井武『ton paris』とパリの画家たち」にちなんだワークショップを開催しました。

日時：3月14日(土) 13:30～15:00

会場：図書室



ワークショップチラシ



野見山暁治《当てにはならない》2021年 練馬区立美術館蔵



野見山暁治《室》1975年 野見山暁治財団寄贈

[同時開催] 特別展示

戦没画学生慰霊美術館「無言館」の作品

次回展覧会のご案内

野見山暁治 空にあそぶイメージたち

2026年4月25日(土)～6月21日(日)

野見山暁治(1920-2023)は、どこかにある風景をさぐりながら、心に広がる風景を鮮やかな色彩と躍動感あふれる形象によって描き続けました。一般財団法人 野見山暁治財団より2024年度に寄贈された素描25点を中心に、油彩や版画を加え約40点により、昭和戦中期から晩年までの創作の軌跡をご紹介します。



無言館外観

編集
発行

公益財団法人 大川美術館

〒376-0043 桐生市小曾根町3-69

TEL 0277-46-3300
FAX 0277-46-3350
URL <http://www.okawamuseum.jp>